

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 土居 伸彰

土居伸彰氏の博士（学術）学位請求論文『個人的なハーモニー——ユーリー・ノルシュテイン『話の話』を中心としたアニメーションの原形質的な可能性について』は、ロシアのアニメーション作家であるユーリー・ノルシュテインの『話の話』（1979年）の詳細な考察を主軸として、ノルシュテインの作品に代表される個人作家（おもに個人で製作する作家）によるアニメーションの独自性を明らかにするとともに、そこで得られた視座からアニメーション史の再構築を行なった論文である。

本論文は四章からなる。第1章「「すべての文明から離れた隠れ家へ……」——『話の話』と「アニメーション映画」の想像力」では、「アニメーション映画」という呼称が用いられ始めた1950年代フランスにおける議論に立ち返り、「アニメーション映画」の独自性が、コマ撮りの原理に依拠した、個々の作品固有の時間の創出にこそ認められていたことを見出し、ノルシュテインをはじめとするアニメーション作家の実作のうちに、そのような時間感覚の表現手法が具体的にたどられていく。それによって本章では、『話の話』が「アニメーション映画」特有の時間感覚を再発見した作品であるという歴史的展望が示されることになる。

第2章「「われわれのすべてが自分の木々をもっているのです」——「個人的」なアニメーションを文脈化する」では、カートゥーン・アニメーションやディズニー・アニメーションを中心とする従来のアニメーション史に対して、土居氏が「個人的」と称する、個人作家によるアニメーションがどのように位置づけられるのかを論じている。土居氏によれば、個人的アニメーションは現実に対する個人作家固有の関係性を描くものであり、観客の世界観とのあいだに生じる齟齬こそを積極的に活用することにより、観客に対して現実認識のあらたな可能性を提示する力を有しているという。土居氏はそうした観客への作用の構造を、ノルシュテインに大きな影響を与えたセルゲイ・エイゼンシュテインの映画理論における、製作者の情動と密接に結びついた風景描写をめぐる議論などを手がかりとして明らかにしている。

第3章「「私は現実から書き写すのだ……」——『話の話』とデジタル・アニメーションの不安定な現実」においては、現代のデジタル・テクノロジーを駆使したアニメーション実践との比較を通して、『話の話』が分析される。『話の話』は、さまざまなスタイルのドローイングや写真などの素材を撮影装置内で組み合わせることで作られており、この手法は、実写とアニメーションなどの異種の素材をヴァーチャル空間で合成するデジタル・アニメーションにおける「コンポジット」に近い。土居氏は、実写をトレースして用いる技法である「ロトスコープ」による作品など、近年のアニメーション作品におけるヴィジュアルのハイブリッド化とそれによって生まれる浮遊感のある独

特な現実描写に注目し、そこに『話の話』の現実感覚との通底性を見る。そのうえで、この両者に共通するものが、エイゼンシュテインによって「原形質性」と名づけられた性質のうちに見出されていく。アニメーションのこの「原形質性」とは、観客の意識のなかで視覚的表現の意味づけが流動的に変化する性質を指す。「原形質性」は、浮遊感があって変容を繰り返す、通常とは異なる現実の感覚を観客に与える。この点でそれは、個人の記憶やアイデンティティの流動を描く作品にとくに強く見られる、と土居氏は指摘し、この概念によってアニメーション史を貫くひとつの系譜が描きうることを示した。

第4章「「メタファーは世界の扉を開け放つ」——アニメーションの原形質的な可能性」は、ノルシュテインが「メタファー」と呼ぶ対象のうちこそ、その作品の「原形質性」が宿っていることを明らかにしている。アニメーションにおける「メタファー」とは、グラフィックそのものではなく、それが喚起する流動性のあるイメージである。土居氏はこの原形質的なメタファーにあたるイメージが、『話の話』ばかりではなく、他の個人作家のアニメーションや、きわめて「個人的」な色彩の強い宮崎駿『風立ちぬ』のような作品においても、死者たちの亡霊や幼年時代の記憶といったテーマと深く結びついていることを発見している。このようなテーマは『話の話』において、日常的に営まれる生の実感の表現と密接に関連しており、本論文は結論として、『話の話』というアニメーション作品の核心にある「謎」としての魅力を、原形質的に変容を続けるアニメーションそれ自体に宿る「個人的なハーモニー」に見出そうとする。それはあくまでノルシュテイン個人が見出した生の意味のメタファー的表現であるが、観客はその徹底して個人的な性格のうちに、現実が変容する可能性を感知するのである。

以上のように土居氏は、ノルシュテインの一作品を軸とし、従来アニメーション史を反転させるようにして、個人的なアニメーションが有する表現の独自性を歴史的に位置づけ、その可能性を鮮やかに示している。『話の話』が多面的に分析され、ノルシュテインの表現手法とその背後の思想が明らかにされている点はもちろん、それがアニメーション史の再検討にまでつながっていく、本論文の野心的な構想とその説得的な論旨は、審査委員から高く評価された。さらに、エイゼンシュテインの映画理論、とくに「原形質性」の概念の援用によって解明されたアニメーションの特性は、アニメーション論のみならず、映像論やイメージ論全体にわたる広い射程をもつ成果であると言えよう。審査委員からは「概念規定にやや精緻さを欠く」との指摘があったものの、アニメーションに関する該博な知識と明確な史観にもとづく力強い筆致による論述は、ノルシュテインをはじめとする個人作家たちへの共感に満ち、情緒的表現に流れる一歩手前で、個々の作品のもつ原形質的な流動性を巧みにとらえている。これらを踏まえた総合的評価として、本論文がアニメーション論およびアニメーション史に対して大きな学術的寄与をなすものであるという点で、審査委員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。